



## 木を見て森も見よう (医療費の財源に関する一考察)

札幌市医師会中央区西支部  
宮の森スキンケア診療室 院長  
上 林 淑 人

医療費の財源は、ほかでもない国家予算の一部です。年々医療費が膨らみ国家財政を圧迫しています。政府はこれ以上の医療費の増大を警戒すべく医療費削減をもくろみ、患者の自己負担を増やし診療報酬を減らしてきました。その結果受診控えや医療機関の疲弊が問題となっています。

このまま医療費が増え続ければ、さらなる財政の圧迫を回避するために、国民はいつその負担増を強いられ医療機関は今以上の忍耐を強要されるのでしょうか。そして世界に冠たる日本の保険制度を維持し、国民の健康と生命を守り続けるにはどうしたらよいのでしょうか。

現在、景気は長きにわたり停滞し、企業の収益も落ち込み、税収が相当落ち込んでいます。国民の所得は減り続け、その結果消費が冷え込む、いわゆるデフレ不況の真ただ中です。デフレ環境下では周知のように経済規模が縮小し、さらに税収が落ち込みます。その分国債を発行し財源に充てなければなりません。ここでもう一つ問題があります。それはいわゆる国の借金問題です。国債発行残高は900兆円を超え、年々膨れ上がっています。それに対し政府は財政健全化のため、増税と政府支出削減を行おうとしています。

これからも日本の医療制度を維持して支えていくためには、医療費の財源を増やすしかありません。それには、医療費に対する国家予算の分配比率を上げるか、国家の収入、つまり税収を増やすかのどちらかしかないはずですが、現実的な話としては後者を優先すべきです。つまりデフレを脱却し、さらに景気の回復を図り、そして日本経済を再び成長路線に乗せ税収を増やすことです。それにはどうすればよいのでしょうか。

現在の日本は民間の資金需要が少ないのが問題で、銀行は貸出先がなく預金超過の状態にあります。銀行が運用先のない資金で国債を買って運用するような環境なので、国債の金利は上がりず低金利のままです。ですからもっと国債を発行してデフレギャップを埋めるべく、公共事業を含めた思い切った財政出動で景気を刺激する必要があります。また例えば日銀が国債を買い入れることなどで円を供給して、インフレ基調に乗せていくことなども必要か

もしれません。しかし現状は、政府はそのようなデフレ脱却はおろか事業仕分けで支出を減らそうとし、国民も消費を手控え先行きの不安から貯蓄にお金を回している、そんな状況です。もちろん必要のない支出は減らすべきですが、国は必要なことにはもっとお金を使うべきです。そうしないと経済は成長しませんし、ましてや医療費の財源も増やせないままです。

政治家の中には、日本はもう成長しなくてよいと考えている人も多く、また積みあがった借金で日本経済は破綻すると主張する人も多くいます。そもそも日本の国債は約95%を国内投資家が所有し、ほとんどが円建てです。加えて日本は経常収支黒字国、世界最大の対外純資産国であり、そして外貨準備の規模も世界第2位です。財政破綻に陥ったギリシャ等と比較すること自体に無理があるのです。日本が財政破綻する可能性は極めて低いのです。また、いつの間にか公共事業悪玉論が普遍化し、年々減らされています。しかしながら、これからは国内の橋、下水道管、湾岸施設といったインフラの老朽化の問題が起こってきます。無駄な公共事業は悪玉かもしれませんが、インフラの再整備といった公共事業も無駄なのでしょうか。

医師会、そしてわれわれ医師は、目先の医療問題ばかりにとらわれていると大局を見誤る可能性があります。結局、医療を充実させるには財源が必要であり、必要な財源を捻出するには日本経済が成長し税収を増やしていくしかないのです。財政健全化も確かに重要ですが、物事には順番があります。今、国債発行を減らし緊縮財政にシフトし、デフレ対策をおろそかにして増税すれば、さらにデフレが進行するのは明らかです。それは橋本政権時代に緊縮財政と消費税増税を行い、その後マイナス成長に陥った事実を見れば明白です。そうなれば、さらなる税収減により医療費の財源も足りなくなります。まずはデフレを脱却させるのが先決です。

政治家や政党がどんなに医療重視の姿勢を見せて支持を訴えようと、日本をどのような国にしていくのか、日本経済をどう成長させていくのかといったビジョンが明確でないと口先だけの話になります。しかも政府は最近、「平成の開国」だとのスローガンを上げてTPPを推進しようとしています。マスコミは農業問題と輸出産業だけの問題のように報道していますが、医療の世界も例外ではなく、医師会が反対する混合診療の解禁など日本の保険制度の根幹をも揺るがす可能性があるのです。

医師会、そしてわれわれ医師は、医療問題はもちろんですが、国家をどうしていくのかという大きな問題を無視できないのです。「木を見て森を見ず」で

あつてはならず、日本の将来像や経済的な成長に関してもっと政府に提言していくべきです。



## 地震と少子化問題

札幌市医師会東区支部  
八田内科 院長

八 田 一 郎

この原稿を書いている時点（3月23日）で今回の地震の被害は進行中で、今後の見通しはまだたっていない。幸いなことに、現政権の若いタレントのおかげで日本中がパニックに陥るのをかろうじて免れている。もし某野党が政権をとっていたなら、良く晴れた週末の午後のこと、ゴルフにでかけて連絡の取れない閣僚が続出し、確実に初動が遅れたであろうことは過去の例からも想像できる。

さらに石原都知事の発言にも唾然とさせられた。東京の繁栄のために原発を福島県に押し付け、沖縄に基地を押し付けて自分は再選をもくろむ。今回の震災の被害者に対して、我欲に対する天罰のせいだといつてはばからぬ感覚は、単なるぼけた保守主義者のたわごとにとどまらず、リビアのカダフィ大佐よりも愚かしい。同じようにセ・リーグの早期開催にこだわった我欲のかたまりであるジャイアンツの渡辺恒雄も同罪である。

さて今回の震災は現代文明の限界が明確に示されたといつていいだろう。これは原子力だけでなく、医学や医療の面でも同じである。先日国会議員の野田聖子さんが、50歳直前で人工授精にて出産をした。結局、重たい障害を持ったお子さんが生まれてしまい、本人も周産期の合併症でかなりcriticalな状態で、最終的には子宮を全摘している。生物学的な限界を超えて生殖医療の技術は拡大しているが、これに伴うリスクも増大している。今後このお子さんにかかる莫大な医療費や養育費はいったい誰が負担するのか、国会議員である本人に聞いてみたい。

さて、日本の危機が叫ばれているが、われわれにとっての希望は新たに日本の文化を受け継ぐ若い世代、そして子供たちである。少子化対策の抜本的解決はもちろん出生率の増加が必要なことは誰でも分かっている。生物学的には出産適齢年齢は十代後半から二十代前半で、その年齢であれば安産であるし、周産期の合併症が少ない。こんなことは産婦人科の先生方にとっては常識である。しかしながら、社会

的、経済的に今の日本においてはその年齢で出産することはなかなか難しい。ただし、出産年齢の高齢化に伴う危険性に対しての警鐘を鳴らすのは、医師会として当然である。

少子化対策の一つとして、民主党政権になりやっと子供手当が始まった。残念ながらマスコミ等で話題になるのはその目的、有効性ではなく、与党と野党とのチキンレースの政争の具でしかない。

先進国の中でも出生率が高いフランスでは各種の子供手当が充実している。基本的には2人以上の子供がいる家庭では124ユーロ（約1万5,500円）、3人目からは1人につき159ユーロ（約2万円）の手当がつく。さらに11歳以上になると35ユーロ（約4,400円）、16歳以上になると62ユーロ（約7,800円）の加算がつく。親が死亡したり離婚したりしても孤児手当が加算される。片方の親を失った時は87ユーロ（約1万1,000円）、両方の親を失ったときは116ユーロ（約1万4,500円）が支給される。

妊娠すると7ヵ月目に984ユーロ（約11万円）の一時金を支給される。ここは日本と似ているが、すごいことにこれは養子縁組みにも適応される。妊娠の場合に比べて1,788ユーロ（約22万4,000円）となんと2倍の金額がもらえる。さらに育児のため仕事を休職したときには、育児休暇補償として最大月額789ユーロ（約9万9,000円）が支給される。障害児を育てる親に給付される障害児手当があり、これは障害の度合いで124ユーロ（1万6,000円）から1,000ユーロ（12万5,000円）と増額される。低所得層に対して、6歳から18歳までの就学する子供を持つ家庭では児童手当が300ユーロ（約3万8,000円）加算される。そして、子供が病気になった時に支給される看護手当、子供を持つ家庭に対しては住宅手当、引っ越しの際には引っ越し手当まで用意されている。

このようにフランスの子供手当は二人以上の子供を産むことに主眼がおかれ、現実に即して細かく制度設計されている。日本の現金丸投げ、かつ所得制限なしの中途半端な制度とは一線を画すものである。これらの政策のおかげで、フランスでは出生率が最低の1.6から最近では2.0以上まで回復している。日本も単なる票欲しさのためのばらまきと批判されないためにも、また本気で出生率向上のためにも制度の充実をはかるべきである。

今、日本は悲しみと不安にさいなまれている、ストレスもたまって二次的に精神的、身体的な症状が悪化してきている患者さんも見受けられる。こんなときこそ日本人に安心をあたえ、信頼を得られるよう、さらに少子化を食い止め新しい日本を再生できるよう、われわれ医師会員の奮闘が望まれる。